

論 説



品質工学における技術の在り方 (3)

State of Technology on Robust Quality Engineering (3)

矢野 宏*

Hiroshi Yano

品質工学というのが汎用技術であるとするならば、従来の専門技術とは異なる有り様があるはずである。生産システムの設計という考察の最終的な結論は、品質工学の考え方を徹底する以外にないということであった。さらに、技術者自身の有り様も変わらなければならないはずである。職場が変わったとか退職したなどでは、学会賞を受賞してあれだけの成果を上げたのだから、中止することは起こらないと思うのだが、実際にはどのような事情があったかは不明だが、退会する人は多い。

企業内における品質工学の活用にあたって、トップダウンかボトムアップかという話はしばしば議論される。経験的にいえば、トップダウンとボトムアップがうまくかみ合ったときに力が発揮されるように感じるが、連載(1)のマネジメントの考察において、個々の技術者の立場において放射型、双方向型の展開が必要であることを明らかにした。しかし、実際にはそうもいかないで、まずボトムアップの立場での推進の戦略を探る。

3. 品質工学におけるボトムアップの技術戦略

3.1 継続性の実態

しばしば見かけることは、活発に品質工学の事例を発表したり、発言したりしている人が、突然に姿を消してしまうことである。事情を聞いてみるとさまざまではあるが、本人と周囲との関係にあることが多いらしいとしても、必ずしも理由が明確でない場合もある。まず、事実関係の調査から始める。2010年11月6日、筆者の主宰するNMS研究会に

において「品質工学の活動を継続するには一受賞するとなぜ止めるか」という討論会を行った。その時の資料を参考にする¹⁾。

「今回のテーマは前から感じていたことであるが、重いテーマになったようである。以下の表に示すように、受賞するような者はさぞ活躍しているであろうと思うのは錯覚であることが分かる。この表だけで継続性を判断するには無理があるが、受賞するような活動と、継続性のある活動とは別なことであると割り切った方がよいのではと考えるようになった。すなわち、受賞した研究はその場限りの仕事であり、継続性とは自分をマネジメントすることであろう。このように見れば、ある程度の区別はつくのではなかろうか。」

そこで1993年度から2008年度までの論文賞と発表賞の筆頭者のその後を追ってみたのが表3.1である。同一人が何回か受賞している場合があるので、それは1回と数えた。賞は論文賞、発表賞、ASI賞、実行委員長賞などがあるが、これも複数回の場合は1回とした。表3.1より分かったことは、受賞後も発表を継続している人は約20%であり、退会が同じく20%で、約60%は受賞後の発表はない。受賞後の言葉を読むと、「さらに精進する」というのが多いことから、もっと発表が継続してもよさそうと思うのは、こちらの期待過剰ということになりそうである。筆者は個々の事情も知っていることから、なぜそのような経過をたどったかというのが分からなくはないが、企業の場合は継続して発表することは想像以上に困難ということであろう。さらに退会にしても、いわゆる停年退職というのものもあるが、現役でありながらも退会している場合もある。

* 応用計測研究所(株)